ある日のこと・・・・。

野行く

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ある日のこと・・・・。

【Ｎコード】
Ｎ１７３５Ｄ

【作者名】
野行く

【あらすじ】
この話は、日常のことを分かりやすくギャグ風味で綴られる、ちょっと変わった物語である。この物語の主人公ユールは、よく変わった夢をみるという

第1話　愉快な仲間たち

この話は、日常のことを分かりやすくギャグ風味で綴られる、ちょっと変わった物語である。

（夢を見た・・・何かすごい夢・・・この夢の内容を覚えてる限り話すと、海岸沿いの道を歩いていると・・・、何も突拍子も無く、誰か自分に向かってとび蹴りしてくる奴がいて・・・そして自分はヒョイ
と避けると・・それは、別の人の顔面にヒットして、その人はとび蹴りして来た人の対戦相手で、いきなり蹴られたことに激怒してその人をボコボコにする前に口笛を吹き、３０人弱の人が来て口笛を吹いた人も一緒にボコボコにして、（まるで、１対２７というのはリンチでしょう）相手がヘトヘトになるまでしたが、ボコボコにされた人は負けじと大人数の人々を倒しまくったというそんな訳の分からない夢・・。）

（なんでこんな夢を見たのか自分でも理解に苦しみ、苦しみまくって死ぬんじゃないかというぐらい衝撃的だった・・・。）

そして、朝日がさんさんと降り注ぎ、ベッドのそばにあるカーテンが揺れ、そして、ここの静かな場所に
似合わない、電信柱の鳥も逃げ出しそうなイビキをかいてる奴がそこのベッドで寝ていた。

グガーッグガーッグガガーッ

そして、この狭い部屋にたたずむ一人の女性がいた。
この女性は優しく、このイビキをかいてる人を起こしてるようだが、

どうやらベッドで寝ている奴は見た目からして男みたいだ　だが、その起こしている女性は業を煮やしてこんなことをした！

そうして、自分が誰かに起こされるまでずっと爆睡していたら、誰かがいきなりベットの布団ごと体が弾き飛ばされ、そして体が壁に激突してようやく爆睡した男が目を覚まし、こうしゃべった。

「いたた・・・いつも思うけどそんな起こし方は無いだろう　ユン！」

そして乱暴な起こし方をした　ユンがこう反論した！

「わたしがユールを普通に起こしても起きないから仕方無くしてるのよ！」

「だからってなあ・・・もっとましな起こし方があるだろう・・・。」

「優しく起こしてみたけど、今したのが一番効果的だったのよ！」

はあ・・・とため息をつきながらユンの話を聞いた。

ユンは話をこうきりだした。

「ユールが家の近く散歩したいって言うからわざわざあなたの部屋にきてるんじゃない！悪い？」

そしたらユールは・・・。

「あ・・・そうだったな。」

その言葉を聞いてユンはため息すら出ずがっくりした・・・。

第2話　爬虫類と人間

そしてユールが連れて行きたい奴がいるらしい。

「ただ散歩するだけでは・・・暇だからさ　こんな奴を連れて行きたいのだけど。」

そう言うとユールは、自分の部屋の外にいる、ワニみたいな動物を呼び出した！

ノシノシノシ・・・。何か部屋の中にその動物がゆっくりとだが、その動物の瞳は鋭かったこちらへ向かって来ると、いきなり駆け足で、その動物はユールの顔に向かって噛み付いてきた。

ガブっ

「イダダダダダッ　おっおれだよ忘れたのか？」

そしてそれをずっと見ていたユンがこう言った。

「あんたこんなもの飼ってたの？それで体中傷だらけなのね・・・。」

このワニはしつけとかは、ほとんどしておらず、ユールは図星だった。

「・・・・・・・「（やっぱりもっとしつけておけばよかった。）

」」

はいっ終わりましたねっ「ある日のこと・・・。」第二話！

また・・手抜きしてますね私ったら・・・

でもまあ・・それでも書こうという意欲があるだけマシですけどね・・・

この物語は、ヒロインがよく出てくる物語でもあるのです・・・。

えっそれがどうしたって？まあ見てみればわかりますよ！　最後まで見たらすっきりしますってっ

まあでも強制はできませんけどね・・・。

あと最後にですね・・・覚えててほしいことがあるのですが、この物語は終わりに近づくにつれて恋愛チックになっていきますので・・・

コメディの要素はちょっとだけなくなります・・・これだけは覚えておいてください。

じゃあ今回はこの辺で、さよなら！

第3話　ある衝撃的な出会い！

そしてユールが扉に向かって言った。

「だれ？」

そしたら扉の向こうの人が言った。

「失礼しますお客様がみえてるのですが。」

その人が言ったらユールは、こういう反応をした。

「今、散歩に出掛けるんだお客がいいって言うなら後にしてくれないか？」

そしたら扉の向こうの人は。

「ですが、お客様が言うには・・・わあ！」

扉の向こうの人が言うよりも、早く扉の向こうで何かあったようだ、そしてユールが何かあったのかと思い、部屋の扉を開けてみたら！

ビューーーン・・・ドガッ！

突如、風が起こったと思ったら何かにぶつかって、ユールは床に倒れこみ、風かと思ったそれは・・・！

「ヤッホーユール元気ー？」

どうやら、風かと思ったそれは何と女の子だった・・しかもお決まりの様にユールの上に座ってる・・。

そして乗られてるユールの方は愚痴を言うように言った。

「まったく・・・おれに会う奴は何でいつもこうなんだ・・・それに、なんでいつもいつも、おれの体の上に乗るんだよ・・ヒアリー・・。」

そして当然の様に、そのヒアリーは言った

「だって・・・おもしろいし・・・ユールの背中が居心地いいから・・・・。」

ユールはため息をつきながら何で、（おれは、ヒアリーやユンのクッションじゃないぞ・・・。）こころの中で思ってしまっていた。

すっかり忘れさられていたユンが何かを言い出した・・。

第４話　長距離　散歩。（前書き）

ユール（主人公）がユンに散歩に行きたいと言いそしてその日ユールがなかなか起きないのでユンが布団をひっくり返して起きたそしてユールは散歩に連れて行きたいのを増やしたいからと言ってワニを連れてきたがユールはワニだけのはずが思わぬ来客が来て名前はヒアリーでやや強引に自分も行きたいと言ってきた！

第４話　長距離　散歩。

ユンがあまり発言するチャンスないことを根に持ちながら、こんなことをユールにしゃべった。

「そろそろ散歩に行こう、このワニもまちわびてるよ・・・全くこのワニが暴れたりするものだから・・・別にワニなんか連れてこなかった方がよかったんじゃない・・・。」

そうユンが言ったら、ユールがワニをかばう様にユンに言った。

「な・・なにをいうっ　このワニは外国の直輸入で仕入れた貴重なワニなんだぞっ　しかもこのワニは他のワニとは違う・・・そう、このワニはおれに愛されるために生まれてきたんだ！」

ビシイッとワニを指差した！

そういうユールからの返答を聞くと、ユンは、反論する気も失せてやる気が無さ気にこう言った。

「ハア・・・・別にその話はいいからさっさと・・・・出掛ける支度をしなさーい！！！」

そうしたらユールは、以外にも素直に支度を始めた、そして、あらかたの支度が終わってこう言った。

「んじゃぼちぼちいくとするけど・・・・・暇だから長距離さんぽするか！」

そしたらヒアリーが付いて行きたいと言い出した。

「ねえもう散歩行っちゃうの・・・ならわたしも付いて行くよ　よし決まり！」

ヒアリーがそう言うと、ユールは。

「おい・・・お前まで付いて来るのかよ・・・・。」

ユールが不満そうに言ったら・・・ヒアリーは。

「あたしがいくって言ったんだから行くの！」

ヒアリーがそう言うと、ユールも無理やり納得せざるを得なかったらしい・・・。

第5話　散歩の途中に・・・。（前書き）

ユールたちはヒアリーの強い押しでやむなく散歩に出掛けた所はなんだかおばけでも出てきそうな
所だった・・・そして、そういうやり取りしていたらいつのまにか、
ポツポツと雨が降ってきてユールたちは雨宿りできる所を探していたらヒアリーが何かに感づいたようだ

第5話　散歩の途中に・・・。

ユールたちがさんぽに使うこの道は、川沿いの道では無く、森林だった。
それも怪しげな森で人面木が立ち並んでいて、ユールたちが歩いてる道以外は全部空間が歪んでいる。

そして不満そうにユンは言った。

「なんで散歩のコースが、いかにも何かありそうな森なのよ・・・しかも、カラスとか色々なのがいるし・・・。」

そしたらユールは得意げにこう言った。

「なんでかって・・そりゃあんたたちの困った顔を見るのが生きがいだからな・・・そしてここはおれの家の側だし・・・ああここにいると元気がどんどん沸いて来るな～・・・（殺気！？）」

ユールは後ろに殺気を感じ、少しずつ振り向き、後ずさった。

「（あなたを・・・・いや、お前をボコボコにする！）」

そしてユールはなにもいえぬまま、ユンのぶちのめす対象になり・・・・、あとは文章だけでは表現できないような光景が広がっていた・・。

そして、ヒアリーはユールが殴られてる様子を見て思った。

「（・・・言いすぎよ・・・。）」

そして、ヒアリーやワニが休んでいて、ユンの気の済むまでユールを集中攻撃していると、急に空が曇りだし、そして、雨の滴がポツポツ落ちてきた。

そして、ユンの集中砲火を受けている間に半分気を失ったユールは、雨が降ってきたことによって、完全に目を覚まし、そしてユールはどこかに雨宿りしようと、ユンたちに言った。

そしたら、ユンは言った。

「もちろん雨宿りするけど、でもどこに雨宿りする場所があるのよ・・・。」

確かに、ユールたちがいる範囲で、この怪しげな森には雨宿り出来そうな場所は、少ない。

だがユールは言った

「だが、そう天候はお前の結論を待ってられないようだし、とにかく雨宿り出来そうな所まで急ぐぞ。」

そしたら、ヒアリー　が何かに気づいたようだ。

第6話　雨の中で何かが。（前書き）

ヒアリーは何かに感づいてユールたちは空をみたら火の玉らしきものが高速で来たが・・・避難出来る小屋とかは見当たらなかった・・・が、そのとき誰かが・・・

第6話　雨の中で何かが。

ヒアリーが何かに気づき、ヒアリーがユールたちの進行方向を指差してこう叫んだ！

「あっあそこに・・・・・火の玉が高速で向かって来るよ！」

そしたらユールは。

「はっ・・・　まさか・・火の玉というのはゆらゆら浮かんで来るもんだよ・・・・って、えええええー！？」

バリバリバリッ

ユールがみたのは、火の玉ではなく雷で落ちた、電気を纏った球体だった。
しかも超高速でユールたちの方に向かって来る！
ユールがびっくりしたのと同時に火の玉と叫んだヒアリーも驚いた。
そしてまた雷が落ちた！

ピッシャーーン！！

そしてヒアリーとユール同時に叫んだ。

「うわあああああっ！」

「きゃあああああっ！」

ヒアリーは全速力でにげたユールはユンたちに声かけながら、走った！

ダダダダダダッ

「みんなあっにげろーーー！！」

そして全員が走ってる時に、小屋らしきものは、ほとんど見つからず、まだまだ走り続けた・・・。
そして、ユールたちが必死に嵐をしのげる所を探していると、どこからか人が見えはじめ、しかもその人影は、まっすぐにユールたちの方へ向かって来る、そして、ユールは目を凝らして見ると・・・どうやらその人影は、男性だった・・しかも、ユールより地味な服装をしている、その男性が着ている服は地味だが、服よりも髪の色が赤であることがその男性であることを示している。

「・・・（だれだこいつ・・・・？）」

しかしその男性は、何もしゃべらず、何かをユールたちに語り掛けた・・・・。

「お前たちは行け・・ここはおれが何とかする・・・・。」

いきなりその男にそう言われて目をパチクリするユールであるが、何もしゃべらずにはいられないと思い
ユールはその男に喋りだした。

その時！

ゴロゴロゴローッ　ドー―ン！！

その男とユールの間に落雷した、まるでその雷がユールとその男の何かを示しているかのように・・・。

「おい・・・お前の名前はなんなんだ？」

そしたらその男性は一呼吸置いて、こう喋りだした。

「ふう・・・名前か・・・おれの名前は・・・・ノルスだ。」

そう言うとユールは。

「じゃあノルス何しに来たんだここへ・・おれたちの行く手を阻んでるのか・・・それとも・・・。」

そのノルスは首を横に振り、こう静かに語った。

「いや・・少なくともお前たちの敵ではない・・・言えるのはそれだけだ・・・それよりも、お前たちはこんな所で立ち往生している暇は無いだろう？」

そうノルスは言うと、ユールは今気づいてこう言った。

「あっそうだったな・・・だが最後に単刀直入に聞きたい事があるんだけど、お前は一体誰なんだ？」

そしたらノルスは。

「おれはただのしがない放浪者だ・・・これでいいか？」

そしてユールは。

「ああ　ありがとう、じゃあな！」

そう言うとユールたちはノルスに別れを言って去って行った。

第7話　雷と雨のあとに・・・。

ユールたちが雨をしのげそうな所をさがしてる間に、ユールは、愚痴みたいなことを口にした。

「はあ・・・全く体は濡れるし・・どこにも小屋みたいなのは見つからないし・・・良いことなしだな・・。」

そうここは、枯れ木ばっかりでちっとも葉っぱの生えている所がほとんどと言って無い所だ・・だが、まだここは家の近くだったりする・・ユールはそのことに気づいていない。

だが、このユールのボケに賛同してくれる者もつっこんで来る者も、いなかった・・・ユール以外の全員も全身ずぶ濡れと疲労のおかげで誰も話す気になれなかった・・。

そしてユールが何かに気づいた。

「あ・・・空が・・・空が晴れてきた！！」

そしたら、ユンも合わせて言った。

「そんなに大声で言わなくても聞こえてるわよ！」

だが、ユールは興奮のあまりこんなことまで喋った！

「ヤッホーこれで、お前たちを苛め抜くことができるぞ～イエーイ！！」

だが、そのセリフにユンは。

「はあ・・全く・・・あなたは人をいじるの好き・・・？」

ユンは、（こんなのがあめのあいだと凄い変わりようだわ・・）と思っていた。

要するに、せいかくで言うとまじめな性格がいきなり活発な性格になったということだ。

そしてそのユンの問いにユールは。

「ああ　そうだ！」

そのユールの答えにユンは返す言葉も無かったらしい・・・。

第8話　そして帰り道・・・。

そして、空が晴れてきて、今まさにユールの気分は最高潮だった。だが、こうも天気で気分が左右されるというのは、通行人から見ても分かりやすい性格だった。例えば、雨だったら気分が滅入って、おとなしくなるんだが逆に、太陽がさんさんと照っていたらスキップして、どこでも地面にゴロゴロ転がるというちょっと困った癖である周りの人から見るとだが・・・。

やっぱり、ユールはスキップをしていた・・・。

「♪♪♪～（フンフフ～ン。）」

ユールは足で軽快なリズムを立て、今にも表情から笑いが洪水となって出そうな勢いである。

そういうユールの変貌振りを見ているユンほか一人と一匹は、こう思った。

「（・・・なんだこいつの性格は・・・・人の気分というのはすぐ変わるものなのか・・？」
そして一斉に。

「（違うと思う・・・。）」

もはや、このユンほか一人と一匹は呆れ果てていた・・・。

ユールの行動に呆れながらもこうユンは言った。

「ねえ・・あの人どうなったのかな～なんでこうひどい天気だったのに急に晴れたのかな・・・。」

そしたらユールは。

「なんだ～分かってないのか？全くお前たちは鈍いな～はっはっは

～おれみたいなのがいてから～。」

そういうと、ヒアリーはユンとユールの中に割りこんで言った。

「ちょっと！それは言いすぎじゃないのその言い方って、自分が優れているとでも思ってるの？」

そう言い放つと、ユールは両手を振ってこう言った。

「いやいやいや～別にそんな風に言ったわけじゃない～だがあの男を見てるとな、おれがふとこう思った
んだ～『おれに似てるとな感じが・・・。』てね～がらにも無いことを言ってみました～。」

ユンとヒアリーとワニはもうツッコミする気力も失せたらしい・・。

第9話　その後

結局ユールたちは帰れたが、その後のいきさつは、割と普通のものになっていた。ユールとワニはワニに噛み付かれながら行ったが、その一部始終を見て欲しい。

相変わらずユールとワニは仲が悪いが、このワニは散歩中、単独行動はほとんどせず、おとなしかったが、多分このワニがおとなしかったのはヒアリーとユンがいたからと思う。

あとヒアリーとユンは、それぞれ意中の人に告白した！なぜ突然告白をしたかと言うと・・。それは、実は、この女性2人に勇気を持たせるためのイベントだったからだ。

そのイベントがユールが考えた散歩だった。実はユンだけ好きなひとがいてヒアリーにはいなかった、だが、散歩の途中で雨になり、雨宿りする所を探していたら、ある不思議な男性と出会った

その男性はストーリー上では特に目立ったことはしなかったが、ただ書いて無かったところも、ある

雨の中ヒアリーが男性にかけよってこう話した。

「あっあなたはなんでここに来たんですか？」
そしたら男性は。

「・・・・別に・・・世界を放浪してる時に、ここに気まぐれに立ち寄っただけだ・・・それだけだ。」

とその男は言った。

そう聞くとヒアリーは。

「じゃあ！散歩が終わったらあの大きな家のそばにきてください！お願いします！」

すると、その男性はびっくりした。

「1？」

そしたらヒアリーはその男性の返事をきかずにこう言った。

「それじゃあ！まってて下さい！あの大きな家のそばにきて下さいね！　あとあなたのお名前は？」

そしたらその男性は…

「ノルス…」

と男が自分の名前を言って去って行った…

あとその結果は次回お知らせしますので、楽しみにまってて下さい。

第１０話　ノルスとヒアリー

そしてヒアリーは、またユールたちといっしょに、雨をしのげる場所を探しにいって、その時ノレスが
何をしたかと言うと、１つポケットから道具を出して、それを思いっきり空に向かって投げた！

ヒュン！

ノルスが投げた道具は形はボール状で水晶みたいな形だった
一瞬何も変わらないように見えたが・・・そう思ったら！

突然雲行きが変わりどんよりしていた雲が少しづつ晴れ始めた！

そしてその空を見てノルスは言った。

「さて・・・ここでおれがすることも終わったな・・・じゃあゆっくり、あの子（ヒアリー）の所へ向かうとするか・・・。」

ノルスはそういいながら、ユールたちのもとへ向かった・・・。

そして、あの最終話のとおりに話が進んだわけだが・・。

そしてユンの意中の男性というのは、当然のようにユールだったりする。

ユンの方はどうなったかと言うと、それはまだユンの方でも答えは出ておらず、まだドタバタ騒ぎが続くようでまだしばらくかかりそうだ。

そしてノルスが到着する頃にはユールたちはすでにユールの家に着いていて、各々自由行動をしていた。

ノルスは適当に家の周りを散策していると、木の小枝に当たったり植物が茂ってる所をぶつからないようにも行った、そしてようやくヒアリーに会った。

そして、ヒアリーはこうノルスに言った。

「やっぱり来てくれましたね・・・いえ・・来ると思ってました・・・。」

ヒアリーがこういうと、ノルスは、

「・・で、おれに用とはなんだい・・・。」

最終話　ペンダントと約束

そして、ノルスがそう言うと・・・ヒアリーは・・・・。

「あっあのっ単刀直入に言います！わっ私と・・・・・。」

そして、少し間を置いて・・・・。

「お友達になってくださいっ！」

ヒアリーのかおが真っ赤になり・・・「（きゃああ言っちゃった・・・ものの ズバッと・・・。）」

そうヒアリーから返事を聞くと・・・・ノルスは・・・・。

「友達からでいいのか・・・でも、何で突然・・・・？」

すると・・・。

「理由はわかりませんっただ・・・あなたが好きなだけです！」

すると静かだった広い庭が少しざわついてきた・・・・。

そしたらノルスは・・・、

「ああ・・、オレで良かったら構わないが・・・だがオレはここに長く居る気は無い・・・それでもいいか？」
ヒアリーの返事は・・・。

「それでもいいです！ですが・・その前に・・これを・・・。」
そういったらヒアリーは何かを取り出した。

「水色のしずくの形のペンダントです・・このペンダントは、わたしが生まれた時に親からもらったものです・・・わたしにはにぎやかな仲間がいますから・・・これをあなたに貸します・・・。」

そしたらノルスは。

「いいんだな・・・貸しといても・・だがいつ返すかは分からんぞ・・。」

ヒアリーは・・・。

「かっ構いませんっいつでも・・・あなたを待っています！いつまでも・・・。」
そう言うとノルスは・・・。

「そうか・・それじゃまた今度な・・。」

ヒアリーとノルスは堅く握手をし、そして風のように去っていった・・・。
こうしてノルスとヒアリーは友達になった訳だが・・・さっきの庭がざわついていた原因は・・
。
「うわっ押すな！」
がさっドスン！
その一部始終を見たのはユールたちだった・・・。

そしたらユンは怒ってユールを追いかけたがヒアリーはそれをクスッと笑った・・・。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1735d/

ある日のこと・・・・。

2010年10月9日17時38分発行